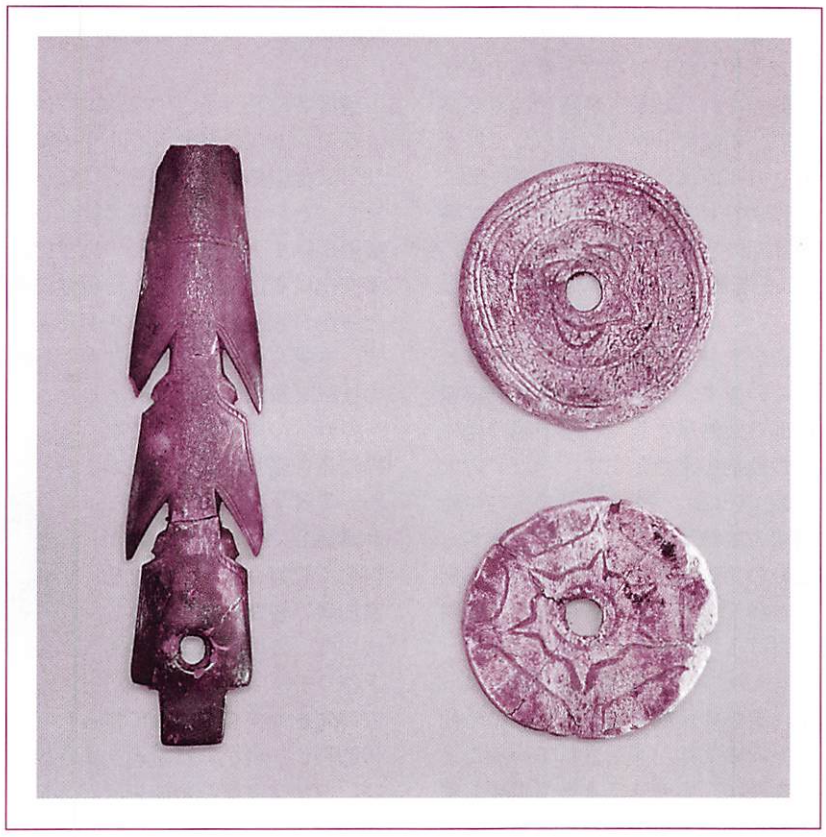
ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No.93



オホーツク文化期の骨角製品（左：A3C21銛頭、右：A3C1・A3C2有孔円盤）
湧別町川西遺跡出土　1991～1993年発掘調査　銛頭（もりがしら）10.5cm、有孔円盤（ゆうこうえんばん）の径4.6cm（2点とも）

オホーツク文化の遺跡からは多様な骨角製品が出土する。写真の銛頭はトナカイ角製でかえしをもち、一部欠損する先端にはスリット状の溝が設けられている。さびのついた痕跡があるため、ここに鉄の端刃（たんじん）を挟み込んでいたと考えられる。体部周囲には幅1mm程の鋸歯（きょし）状の文様が彫刻される。

有孔円盤は合計7点が出土した。トナカイやエゾシカの角、マッコウクジラの歯、鯨骨を素材とし、表面には文様が線刻される。千島アイヌの「クックルケシ」と呼ばれる帯飾りに形態が類似することから、同様の用途が考えられている。

目次　Contents

1　表紙　オホーツク文化期の骨角製品
2　ロビー展「カザフの刺繍壁かけ　トゥスキーズ」／講習会「カザフ刺繍のコースター」
3　館長講座「土器模様の原体を学ぶ　初級編」／映像上映会「サハリン・樺太の映像上映」
4　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

ロビー展

カザフの刺繍（ししゅう）壁かけ トゥス・キーズ

2014.4.19-5.11

共催　NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ

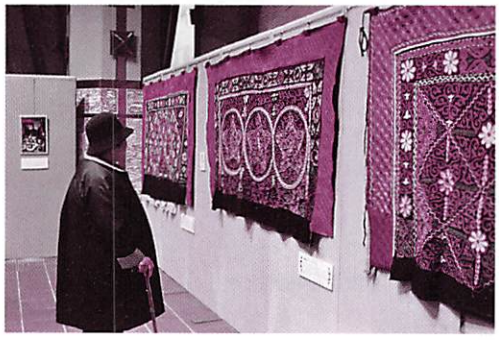
カザフは、中央アジアのカザフ高原で遊牧を営んできた民族です。周囲の大国に翻弄された結果、現在ではカザフスタン、モンゴル、ロシア、中国に分かれて暮らしています。本ロビー展では、モンゴル西部のバヤンウルギー県に暮らすカザフの女性たちにより1960年代～1990年代に製作された布製の刺繍壁かけ（カザフ語でトゥス・キーズ）14点を中心に、カザフの伝統的な暮らしや文化を紹介しました。

バヤンウルギー県で牧畜を営むカザフは、ウイと呼ばれる移動式住居で生活をしています。本展で紹介した刺繍壁かけは、移動式住居の内部の装飾品としてベッド脇の壁にかけられ、防寒や砂よけの役割も果たします。ベッドの大きさに合わせ、平均して縦140cm、横220cmくらいに仕立てられ、ほぼ全面に刺繍の装飾がほどこされています。しばしば結婚などのお祝いのために作られ、家具として贈られるものだそうです。本展で紹介した資料のなかには贈り先の相手の名前が縫い付けられたものもありました。

刺繍壁かけの装飾のパターンは時代や地域、製作者によって一枚一枚異なりますが、装飾の細部を見ると、どの時代でも、渦巻き文様やハート形の文様が多用されていることがわかります。これらの文様は、カザフにとって重要な家畜動物であるヒツジの角や頭を象徴していると言われています。時代や地域差を越えて共通する文様にカザフの伝統文化や民族としての誇りが受け継がれています。

本展では、刺繍壁かけのほか、羊毛やラクダの毛を素材とした手織り紐やフェルト製のじゅうたん、イヌワシ狩りの衣装などの民族資料、現地写真などを展示し、期間を通じて1,205名に観覧いただきました。

なお、4月27日の午前には講習会の講師である廣田千恵子さんによる展示解説会を開催しました。



展示風景

（学芸グループ　山田　祥子）

講習会

カザフ刺繍のコースター

2014.4.27

講師　廣田千恵子　氏

（千葉大学大学院博士前期課程／NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ監事）

講師の廣田千恵子さんは、2008年よりモンゴルのバヤンウルギー県でカザフ文化の調査・研究をおこなっています。とりわけロビー展で紹介した刺繍壁かけや手織り紐など、カザフの装飾文化に高い関心をもち、現地の女性たちから伝統の手芸技法を学んでいます。本講習会では、そのなかから刺繍の技法を教えていただきました。

廣田千恵子さん

カザフの刺繍は、大きな枠に布を張り、かぎ針をつかって縫うことが特徴です。本講習会では、廣田さんが現地で収集されたかぎ針を参加者の皆さんにお配りしました。このかぎ針自体も手作りで、スプーンの丸い方の先をやすりで削って作られています。今回はかぎ針を布に刺し、裏から糸を表へ引き出して鎖目を作る技法を学び、カザフ文様の刺繍をほどこしたコースターを作りました。

コースター（直径10cm）とかぎ針

まずは、かぎ針による刺繍に慣れるため、三種類の練習をしました。直線上に鎖目を作る練習、二色の糸を交互に使ってしま模様を作る練習、そして、鎖目を折り返して角を作る練習です。この練習で基本的な技法を身に付けてから、コースターの文様を作っていきました。

最初のうちは裏から糸を上手く引き出せなかったり、表で上手く鎖目を作れなかったりと苦労される方がほとんどで、会場から「難しい！」という声が上がりましたが、練習を重ねて次第に速く刺繍できるようになると、皆さん夢中になっておられるようすでした。

熱心に刺繍に取り組む参加者

（学芸グループ　山田　祥子）

館長講座

土器模様の原体を学ぶ－初級編－

2014.4.26

講師　岡田　淳子（当館館長）

私たちがよく知る縄文土器の名前の由来となった縄文模様は、どのようにして付けられたのでしょうか？

研究の当初には、土器の表面に編み物や織物を押しつけたのではないかという考え方もありましたが、考古学者山内清男博士（1902～1970）によって模様の原体（施文具）が解明されました。縄文土器の模様は、長さ5cm程の縄を焼き上げる前の土器表面に置き、押しつけながら転がしてできたものだったのです。その後、山内博士は模様原体の発見にとどまらず、数多く存在する縄文土器模様の付け方ほぼすべてを解明しました。講師の岡田館長は、学生時代に山内博士から縄文土器研究について直接指導を受けました。

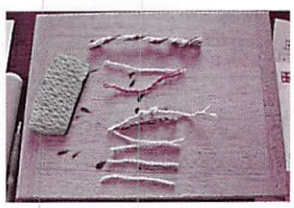
縄文原体の解説をする岡田館長

今回は初級編ということで、縄文原体の基本となる撚り方について解説し、実際に参加者に原体を作って粘土に施文していただきました。基本となる原体は、1回撚りの縄を2本合わせて撚った2回撚りの縄です。2回撚りの縄は、2種類あります。「右上がりに撚られるもの」と「左上がりに撚られるもの」です。多彩な縄文模様は、この縄を基本に、結び目をつけたり、端を折り曲げたり広げたり、あるいは縄同士をまた撚り合わせたりした原体で付けられています。

北海道から九州まで広がる縄文土器の原体の素材はさまざまです。イラクサ科の植物、木の根、動物の腱などが候補として考えられています。今回の講座では、参加者に紙ひも、モップの換えひも、藤の根などを使っていただきました。

講座を通じて、縄文人が手間をかけずにいろいろな土器模様をつけていたこと、そして、その技術こそが日本の手仕事のルーツであることが理解できました。

次回9月20日の上級編では、さらに多様な原体が登場します。



参加者が作った原体（右）と原体で模様をつけた粘土（左）

（学芸グループ　種石　悠）

映像上映会

サハリン・樺太の映像上映

2014.5.25

講師　笹倉　いる美（当館学芸主幹）

写真展「忘れられた歴史のページ　20世紀サハリン先住民のくらし」の関連事業として、当館所蔵映像の上映会を開催しました。

上映した作品は次のとおりです。

1. オロッコ・ギリヤークの生活　資料番号V12.15
　撮影年　昭和13（1938）年
　撮影地　樺太　多蘭もしくは敷香（オタス）
2. 最終段階にて　資料番号V4.15
　制作年　1992年
　製作　　ソン・シネマ社（カザフスタン）
3. ニブフの紋様と装飾　資料番号V11.14
　制作年　1991年
　撮影地　ダリテレフィルム撮影所（ウラジオストク）

「オロッコ・ギリヤークの生活」は、日本民族学会第2回北方文化調査団が樺太に赴いた際に、メンバーであった民俗学者の宮本馨太郎が撮影したものです。樺太の少数民族であるウイルタ（オロッコ）やニブフ（ギリヤーク）が集住していた敷香（現在のポロナイスク）郊外のオタスで住民たちが、白樺樹皮製容器づくりを行ったり、太鼓を打ち鳴らしながら踊る姿や現地の風景が撮影されています。

「最終段階にて」はニブフがもつ課題を過去の映像もまじえながら問いかけています。政府の方針のため、住み慣れた地を離れることによって失われてゆく生業や伝統芸能、石油開発による自然環境破壊、アルコールの被害の状況が紹介されています。「ニブフの紋様と装飾」はニブフの教師が、紋様や装飾を子どもたちに指導している内容のもので、その一部を上映しました。

会場の様子

当館が開館したころに作られた「最終段階にて」では、20世紀のうちにはニブフ語の話者がいなくなってしまうだろうと悲観的な予想がされていました。幸いなことに現時点ではそのようなことにはなっていませんが、当時から変わらず残る課題もあります。

今後も当館の映像コレクションの上映を積極的にすすめたいと考えています。

（学芸グループ　笹倉いる美）

第29回特別展　船、橇(そり)、スキー、かんじき　北方の移動手段と道具

北方の寒冷な自然の中で生活するために発達させてきたさまざまな船や橇、スキー、かんじきの展示を通じて、創造性に富んだ北方諸民族の文化を紹介します。

会期：平成26年7月12日(土)～10月5日(日)
会場：北方民族博物館　特別展示室
協力：国立民族学博物館　市立函館博物館　函館市北方民族資料館
　　岸上伸啓氏　呉人　惠氏　佐々木史郎氏　新谷暁生氏（冒険家・シーカヤックガイド）
観覧料：一般450(300)円　65歳以上300円　高校生・大学生200(160)円
　　※（　）内は10名以上の団体料金（常設展示とのセット割引あり）

アリュートのスキー板
（国立民族学博物館蔵）

関連事業

○ 講演会「皮船とイヌ橇の謎」
　7月12日(土)10:30～12:00　講師：渡部　裕（当館学芸員）
○ イベント「バイダルカ試乗体験」
　7月21日（月・海の日）
○ 講座「黒田清隆一行収集の市立函館博物館所蔵三人乗カヤック―バイダルカ―について」
　8月2日（土）13:30～15:00　講師：長谷部一弘氏（函館市北方民族資料館　学芸員）
○ はくぶつかんクラブ「ミニチュアそり作り」
　8月23日（土）10:00～12:00　講師：中田　篤（当館主任学芸員）
○ 講座「北方海域と船－探検と冒険の物語－」
　8月30日(土)13:30～15:00　講師：新谷暁生氏（冒険家・シーカヤックガイド）

INFORMATION

行事報告

◆4月19日(土)、講習会「まが玉づくり」（講師：永瀬早苗解説員）を開催しました。

◆5月3日(土)から6日(火・祝)まで、「こどもの日イベント」として「ころころフェルトボールのストラップづくり」、「ミニ鯉のぼりづくり」、「缶バッジづくり」、「モンゴル衣装体験」など日替わりでイベントを開催しました。

　写真はストラップづくりに興じる来館者です。

◆5月24日(土)、はくぶつかんクラブ「フェルトでつくるマンモス」（講師：石原生久代解説員）を開催しました。

◆5月31日(土)、「道立オホーツク公園・北方民族博物館施設見学会」を開催しました。

　当館では、ふだん観覧者の目にふれない博物館の裏側などを紹介しました。オホーツク公園では、宿泊施設や建設中の遊具などをご覧いただきました。

ロビー展

◆ 5月24日（土）から6月22日(日)まで、ロビー展「写真展　忘れられた歴史のページ　20世紀サハリン先住民のくらし」を開催しました。

　今回の写真展は、サハリン州郷土博物館との共催となりました。

職員の異動

[退職]
吉野　守（博物館課主査（本部））

[採用]
小田島和之（博物館課主査（本部））
中村裕美（博物館課主事）
鈴木將譲（博物館課主事）

北方民族博物館だより
No. 93

平成26(2014)年6月27日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail：tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
　一般財団法人北方文化振興協会